

第3章 研究のまとめと課題

○「個」と「集団」の捉えについて

今年度、教育課程の再編成を意識しながら事例を検証してきたとき、必ずといっていいほど話題になったことは「個」と「集団」についての捉えであった。例えば、生活のルールといった言葉が出てきた時など、誰にとってのルールなのか、上からの押しつけ的なルールなのではないのか、自分達に必要感があってこそそのルールなのではないのか、基本的な生活習慣に類することではないのか等々、いろいろな視点から多岐にわたって意見が出されることがよくあった。ルールや約束というものは、自分一人だけの世界だと必要のないことである。他者がいるからこそ存在するものだといえよう。そして、幼稚園という場は他者が存在する場、すなわち集団で生活する場ゆえに、ルールや約束ができていくことになる。

さて、「個」と「集団」に戻ろう。私達は話し合いを進めていく中で、一人一人の「集団」の質の捉えが微妙に違っているのではないかということに気づいてきた。また、話し合いの度に「集団」の捉えが揺れるので、私達なりの定義をつくり、それを共通理解していこうと考えた。現段階での共通理解は以下の通りである。

- ・「個」・・・一人一人
- ・他者・・・「個」から見た時、別の「個」のこと。
- ・「集団」・・・二人以上の集まり（形式集団と意識集団がある）。
 - 形式集団・・・教師側の意図的な配慮が大きい枠組みとしての集まり（学年、クラス、グループなど）。
 - 意識集団・・・同じ目的をもった「個」の集まり（仲間、共同的集団、協同的集団など）。

これらの捉えについては、私たちの実践からの経験が核となっている。今後は先行研究との折り合わせも含め、検討をし、その都度軌道修正しながら共通理解を図っていきたい。

○スローガンについて

私達は、年齢ごとにスローガンを設け、それを意識しながら毎日の保育を展開してきた。このスローガンは平成12年度の研究の中で打ち立てられたものであり、その当時の幼児らの実態と教師側の願いを絡め合わせてつくられたものである。3歳児から5歳児にかけてだんだんと一人の世界（個の世界）から他者を含めた世界（「集団」の世界）へと広がりを見せる幼児らの育ちを考慮し、5歳の3学期には教師を含めたクラスの成員一人一人が互いに刺激し合いながら、自分づくりと自治的生活を創り上げられるように3歳の時から指導、援助していこうという思いがスローガンに込められていた。従って、特に3歳児のスローガンには明記されてい

ないが、3歳児、4歳児、そしてもちろん5歳児の生活のなかにもクラス集団という視点が入り込んでいた。

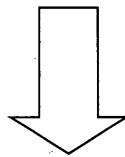
ところが、どうも、他者あるいはクラス集団を意識しすぎて、幼児の実態にそぐわないかわりをしているのではないかという思いが、事例を検証するごとに頭をもたげてきたのである。別の言葉で表すならば、他者とかかわらせよう、クラス集団としてまとめていこうという意識が強すぎて、個への配慮が少々おろそかになっていたのではないかという反省がでてきたのである。

それは、各年齢の一年を振り返っての部分を見るとわかる。3歳児は「バラバラで楽しい」ということが語られている。一人一人の「楽しさ」をもっと大事にしていこうという姿勢の表れである（19ページ参照）。4歳児は「楽しさ」を基軸とした一年の生活ぶりが描かれている。一人一人の「楽しさ」から他者を巻き込んだ「楽しさ」へと、「楽しさ」が膨らんでいくところを、もっと教師が前面に出て支えていこうという姿勢の表れといえよう（52ページ参照）。5歳児は個へのまなざしと他者との関係性、そして協同的集団として生活する意義に目を向けている（65ページ、79ページ参照）。

これらから、いずれの年齢も個に視点がおかれていることが分かると思う。その上で、特に3、4歳児については教師が指導性を生活の随所に発揮しながら個を支えていくことが必要なのではないかということ、5歳児については育ちがバラバラの個を支えるときに、教師はもちろん他者（友達）をも巻き込みながら互いに揺さぶり合い、育ち合うことのできる関係性を大切にしていけばよいのではないかということが見えてきた。

そこで、各年齢のスローガンを次のように修正することとした。

	3歳児・・・友達とかかわり合いながら自分が創る自分の生活
(旧)	4歳児・・・友達とかかわり合いながら自分が創る自分達の生活
	5歳児・・・友達とかかわり合いながら自分達が創る自分達の生活



	3歳児・・・ <u>教師とかかわり</u> ながら自分が創る自分の生活
(新)	4歳児・・・ <u>教師や友達とかかわり</u> ながら自分が創る自分達の生活
	5歳児・・・ <u>友達や教師とかかわり</u> 合いながら自分達が創る自分達の生活

来年度はこのスローガンのもと、幼児の実態に即した生活づくりを目指していきたいと思っている。

○幼小の連携について

前述のスローガンの検討の際に、3、4歳児の育ちと5歳児の育ちの間に何か大きなものが横たわっていること、その大きなものとは、どうも他者へのまなざしなのではないかということに気づいてきた。つまり、自分の生活の中に他者（友達）がどんどん入り込んでくる時期が4歳と5歳の間にあるのではないかということである。さらにいうと、5、6歳児の育ちを一つの大枠としてみることはできないかということが、今、一つの見方として私達の中で高まってきた。

6歳児というと小学1年生である。ここで、幼稚園と小学校の間にあるのりしろ部分をもっと意識した教育課程ができないかと模索しているところである。これは幼稚園サイドだけではできない面を含んでいる。小学校との連携を図りながら、何を大事なものとして共通理解していくのかという理念面から、何が連携できて何ができないのかといった実践面まで考えていきたいと思っている。

幼小の連携面全般の現状としては、小学校の研究部会に幼稚園の研究主任が参加しているという状況、日常的に交流レベルでかかわりがあるという状況がある。何をもちえて連携と見なすのかという定義的な面も含めて、これからも小学校と連絡を取り合いながら前向きに取り組んでいきたい。